

2016年度JROSG 海外出張支援報告書

東北大学大学院医学系研究科放射線腫瘍学分野 神宮啓一

JROSG消化器委員会と呼吸器委員会が中心となって行いました大腸・直腸がん由来肺転移に対する定位放射線治療多施設治療成績のまとめをJROSG 海外出張支援のご援助のもと第58回米国放射線腫瘍学会 (ASTRO) にて発表させていただきました。またAnticancer researchに掲載されました。このたびのご支援に深謝申し上げます。

学 会：第58回米国放射線腫瘍学会 (ASTRO)

場 所：アメリカ、ボストン

期 間：2016年9月25日～9月28日

発表形式：ポスター

タイトル：

Results of SBRT for pulmonary oligometastases from colorectal cancer in Japan: a multi-institutional survey study of the Japanese Radiation Oncology Study Group (JROSG).

発表者：

Keiichi Jingu, Yukinori Matsuo, Hiroshi Onishi, Takaya Yamamoto, Masahiko Aoki, Yuji Murakami, Hideomi Yamashita, Hisao Kakuhara, Kenji Nemoto, Toru Sakayauchi, Masahiko Okamoto, Yuzuru Niibe, Yasushi Nagata, and Kazuhiko Ogawa.

発表内容：

目的

本邦多施設において結腸・直腸由来肺転移に対する定位放射線治療による治療成績を明らかにする。

方法

JROSGに参加する10施設において2004～2013年に定位放射線治療を実施した結腸・直腸由来肺転移93症例・104箇所を後ろ向きに解析した。

結果

処方線量中央値は105.6 Gy BED10であった。77例でアイソセンター処方、24例でD95処方であった。原発の治療から転移巣治療開始までの期間中央値は18.2ヶ月であった。追加化学療法は47症例で行われていた。観察期間中央値は28ヶ月。局所制御率は3年65.2%、5年56.2%であった。全生存率は3年55.9%、5年42.7%であった。2例でgrade3の肺臓炎を認めたが、それ以外のgrade3以上の障害は認めなかった。局所制御に関する多変量解析では、**primary site** (HR=0.375, p=0.025), **age** (HR=0.416, p=0.044), **adjuvant chemotherapy after SBRT** (R=0.246, p=0.003) と **BED10** (HR=0.100, p=0.027) が予後因子であった。

結論

結腸・直腸由来の肺転移巣への定位放射線治療成績は満足できるものではなかったが、線量増加や化学療法を追加することで制御率を向上できる可能性が示唆された。